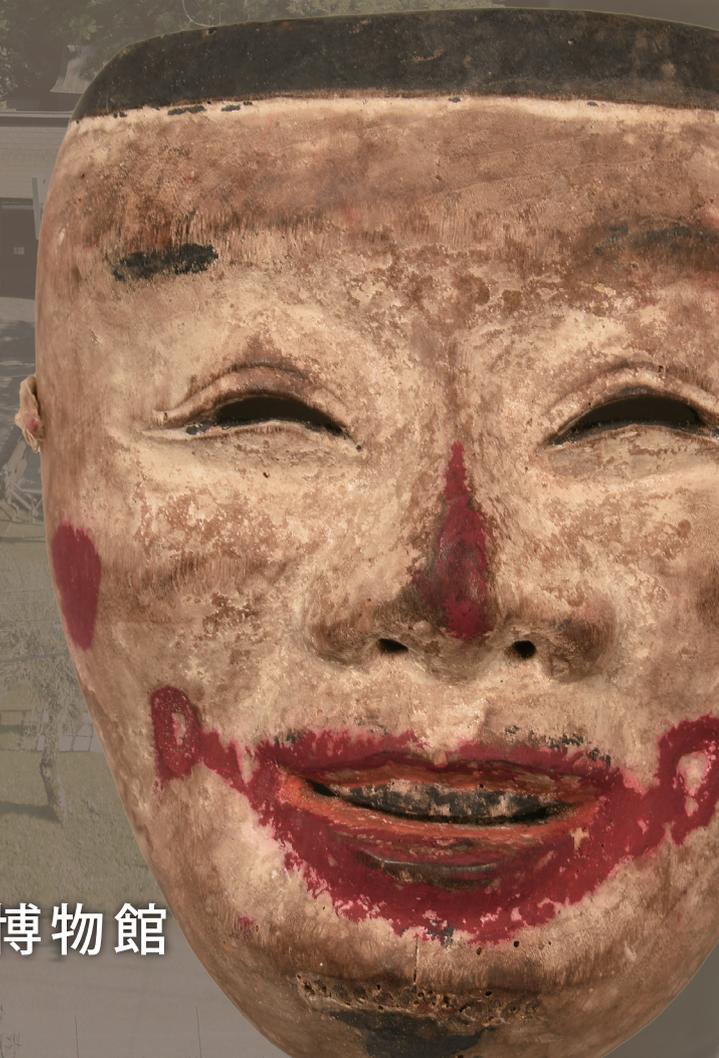


企画展

# 太田古朴が見た山里の文化財

—— 高野山麓・細川八坂神社の仮面群 ——



 奈良大学博物館  
NARA UNIVERSITY MUSEUM



太田古朴は、大正三年（一九一四）吉野町に生まれ、新納忠之介が院長を務めた奈良美術院で仏像修理を学び、その後独力で各地の仏像や石造物を調査して、修理や研究を行いました。それらの成果は雑誌『史迹と美術』誌上や綜芸社から発行した多数の著書で発表しています。

平成一二年（二〇〇〇）の逝去の後、残された仏像修理に関わる資料が鈴木喜博氏（奈良国立博物館名誉館員、本展協力者）により見いだされ、一部が令和二年（二〇二〇）に奈良市史料保存館にて公開されました。その後奈良大学美術史研究室（担当大河内智之准教授）が引き継いで図面や写真等の整理作業を行っています。

本展ではこれら資料から太田古朴の代表的な仏像修理と研究の事例を紹介し、その学術的意義を再評価するとともに、太田が依頼を受けて昭和五〇～五二年（一九七五～七七）に調査と仏像修理を行った和歌山県高野町細川地区の文化財を紹介します。なかでも細川八坂神社の仮面群は、室町時代前期に遡る一具同作の翁系面四面（翁・三番叟・父尉・延命冠者）を含む重要なもので、今回が初公開となります。

太田古朴は大学や行政機関に属さず、在野の立場で仏像を愛好し、その魅力を発信し続けました。それは地域の埋もれた文化財にまなざしを向け、その価値を所蔵者や愛好家に伝え、そのことで文化財の継承につなげていったものと評価できます。この企画展が、誰もが文化財を身近なものとして関心を持ち、継承する人々を支え、そして伝えていく、これからの文化財保護のあるべきかたちを考える機会となりましたら幸いです。

令和六年五月二七日

奈良大学博物館

目次

ごあいさつ・目次・凡例・協力者一覧 1

奈良町の仏像研究者 太田古朴の軌跡 2  
 ―仏像彫刻研究資料論を構築するために― 鈴木喜博

一章 太田古朴の仏像修理とその成果 5  
 ①太田古朴について 5  
 ②金峯山寺聖徳太子及び二童子像 5  
 ③伝香寺の地藏菩薩立像 6  
 ④円成寺の南無仏太子立像 6  
 ⑤東大寺中性院の弥勒菩薩立像 7  
 ⑥興善寺の阿弥陀如来立像 7

大田古朴が見た山里の文化財 8  
 ―これからの文化財保護へのまなざし― 大河内智之

二章 太田古朴と高野山麓・細川地区の文化財 13  
 ①細川地区文化財の調査・修理 13  
 ②細川八坂神社の仮面群 14  
 ③太田古朴が守った地藏菩薩立像 15

太田古朴略年譜 16

凡例

一、本書は奈良大学博物館企画展「太田古朴が見た山里の文化財―高野山麓・細川八坂神社の仮面群―」（会期：令和六年（二〇二四）五月二七日（月）～七月二七日（土））の展覧会図録である。

二、本展開催にあたり鈴木喜博氏（奈良国立博物館名誉館員）の協力を得た。また高野町・高野町教育委員会の後援を受けた。

三、図版掲載資料は展示資料のうち一部である。

四、図版には資料番号、資料名称を表記した。一章の資料解説は節ごとくに付し、節番号、名称、制作年代、品質、法量、解説の順に表記した。

五、本展の企画と図録の編集、写真撮影は大河内智之（奈良大学准教授）が行い、奈良大学博物館学芸員（市田悠人（令和六年三月）、水野良紀、阿久津武大、小野寺大耀）がこれを補佐した。

六、本書掲載図版のうち、参考1については伝香寺から提供を受けた（飛鳥園撮影）。

協力者一覧

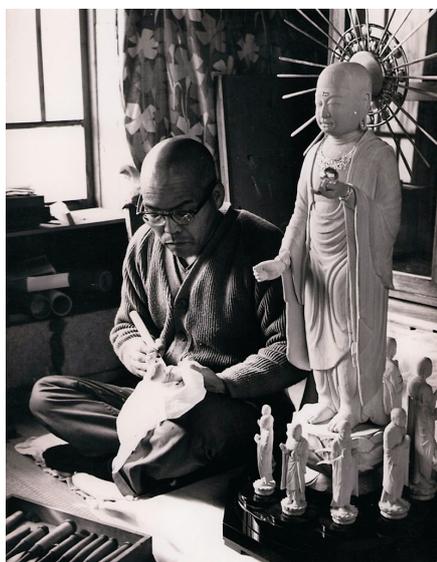
本企画展の開催にあたり、次の皆様から多大なご支援、ご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。（敬称略・五十音順）

【寺院・機関】

- 円成寺 飯野尚子
- 金峯山寺 池田淳
- 興善寺 井手上治己
- 高野町 北河原公慈
- 高野町教育委員会 五條良知
- 伝香寺 島田和
- 東大寺 下井関共直
- 東大寺中性院 鈴木喜博
- 細川区 田畑祐弘
- 細川八坂神社 西村美津子
- 和歌山県教育委員会 西山明彦
- 和歌山県立博物館 西山明範

【個人】

- 藤森寛志
- 巻田崇裕
- 松原瑞枝
- 森田康友
- 山中喜代美



太田古朴 (1914-2000)



## 奈良町の仏像研究家 太田古朴の軌跡

— 仏像彫刻研究資料論を構築するために —

鈴木喜博

### はじめに

昭和の奈良町で活躍した在野の仏像研究家、太田古朴の仏像修理・研究関係の遺品（以下、太田資料と略称）が、ほとんど散逸せずに旧太田邸に残っていることを筆者が知ったのは、平成二十七年（二〇一五）七月であった。ご遺族のご理解を得て、また奈良市教育委員会文化財課の協力を仰ぎ、これら太田資料一括を奈良市史料館（奈良市鳴川町）に運び入れ、奈良県郷土資料の充実を目指して、分類整理することを計画した。市民ボランティアの方々と一緒に史料館の整理室で数年を要して、その全貌を把握することにとつめた。そして、令和二年（二〇二〇）三月、同館において「昭和の奈良町の仏像研究家の足跡／太田古朴・仏像修理研究資料展示」の企画展示が実現した次第である。展示中は新型コロナウイルスの蔓延の世の中で、その惨禍が増幅する時期にあったが、無事に奈良郷土資料としての太田資料の評価と再検証ができたことと筆者は考えている。その後、太田資料の整理作業は令和四年（二〇二二）から奈良大学文学部文化財学科美術史研究室（大河内智之准教授）の方で引き継がれることになり、今回の奈良大学博物館の企画展に至った次第である。本展示の開催に当たり、筆者は展示協力者の立場から、また最初に太田資料の整理に関わったことから、太田資料の概要、すなわち太田資料の性格とその意義について述べることにしたい。サブタイトルに記したように、仏像修復家または仏像研究者が作成・収集した研究資料（調査ノート類および写真など）について今日、一括保存の必要性があることに気づく有識者は限られており、併せて注意を喚起したいと考えている。

なお本稿は、先の奈良市史料館での企画展示チラシの原稿をもとにして、その内容を膨らませて概説することを諒とされた。

### ◆ 仏像一色の生涯

太田古朴（本名、萩原亀一、敬称略）は、大正三年（一九一四）奈良県吉野郡吉野町に生まれ、昭和六年（一九三二）奈良県立吉野工業学校（後の県立吉野工業高校）を卒業後、同年八月から奈良美術院（院長新納忠之助）で仏像修理のための研鑽を積んだが、その期間は短かったようである（昭和一二年退職）、若くして独力で仏像彫刻の製作および修理の世界に入った。戦後まもなく太田は、京都府京都市の妙法院（三十三間堂）境内にあった国宝修理所（後に財団法人美術院）に通い、同寺の千手観音立像（千体仏）の修理に携わったが、昭和三年（一九四八）再び美術院のもとを離れた。その後は定まった職につかず、奈良市の三条通り北の奈良町、すなわち「なら北まち」で、改めて仏像の彫刻家および修復家の道に進んだのである。かくして、父太田は「仏像一色」の清貧な生涯を送ったと次女美津子さんは語っている。平成十二年（二〇〇〇）逝去。享年八六歳。しかし、北半田の旧宅で伺った美津子さんの語りでは、実は家族五人の生計は母静子の裁縫仕事に支えられており、また親戚からの支援に頼っていたという。これを聞いた時には新鮮な驚きをもって、改めて旧宅にあった仏教美術関係ばかりの遺品を見つめ直したことを、いまでも鮮明に覚えている。

### ◆ 私設研究所と研究会

太田は、始めは油留木町、後に北半田中町に移り住み、私設の奈良仏像研究所の看板を掲げた。在野の仏像研究家として、仏像彫刻の新作の傍ら、自身が手がけた仏像調査および像内納入品の発見の報告、それに基づく技法研究などについて、古美術誌の『史迹と美術』に精力的に投稿し、また綜芸舎発行の著書に発表した。

また太田は次第に修理から離れ、軸足を石仏・石塔研究へと移し、奈良石造美術研究会を主宰した。そして畿内を中心とした寺院の仏像の拝観や石仏・石塔の巡礼、すなわち、古美術見学会を企画実行した。彼が作成したその時の配付資料の一部が、太田資料にかなりの数で残っている。それには太田直筆原稿を「青焼き」印刷したもの（全紙サイズ）があり、学術的に詳細かつ高度な内容が含まれる。太田自身が体験した仏像修理の新知見を加えた、図解入りの見学資料である（製作年月日記入）。当時は今日とは違って仏像入門書が少なかった時代と思われるから、このような資料はこの上ない信頼すべき情報源であったかと推察される。次女美津子さんが語る父太田古朴の思い出のなかで、この見学会に触れたことがあり、次のような話をお聞きした。美津子さんが中・高校生だった頃、日曜日が開催日となった時には父太田の助手役として、たくさんの配付資料を抱えながら、会員の方々の後ろについて行ったという。

### ◆ 資料の概要

いま改めて「仏像一色」に染まった太田の生涯のなかで主要な関心事をここに列記すると、仏像彫刻の新作、古仏の修復、修理中の新知見（造像銘記および納入品など）の記録・研究、仏像の技法・構造・木割法の図解の作成、石仏研究（採拓を含む）、仏像・石仏の見学会および配布資料の作成などがある。それらは調査ノート、図面、青焼き印刷物、拓本、仏像・石仏のスナップ写真などの種類の資料であり、太田資料を構成するものである。遺品のなかには仏像彫刻家としての道具類もあったが、それらは太田資料から除外した。奈良市史料館で行った資料整理では、この太田の関心事に沿って分類分け（袋詰め）したものの、さらに厳選する必要があると考えたので目録作成には至らなかった。

また太田資料のなかには、第三者の個人情報を含むものも少なくないので、太田自身の仏像研究資料として、記載

内容が客観的事象としての性格を持つかどうかという基準で選別したことを断っておく。

なおまた太田資料のなかには、東大寺長老の清水公照師の直筆の一行書が一〇点余り含まれている。それは公照師が近隣の老舗商店の屋号の名称を一行書として揮毫したもので、店舗の看板原稿というべきものである。太田はこれを厚板に写して浮彫りして看板を製作しており、太田家の収入源の一つになっていたという。次女の美津子さんも、大きな厚板に彫刻刀を当てるなどして作業を手伝ったという。この清水公照書跡は太田資料とは直接は関係ないのだが、東大寺長老の公照師と太田の親密な関係がうかがわれるものとして、本資料から除かずに残すことにした。公照師が外出の際には休憩がてら北半田の太田邸によく立ち寄ったという。

#### ◆写真資料

太田古朴の出版物には仏像及び石仏等の撮影者として辰巳旭の名が記されている。彼は辰巳写真館の店主であり、店は三条通り（東西に走る）と安らぎの道（南北に縦断）との交差点の東北側の三条通り沿いにあった。太田から連絡を受けると、店番は家族に任せ、撮影機材を担いで終日太田に同行したらしい。以上のことは、先に述べた「太田古朴展」開催中に来館された辰巳氏のご遺族（実娘せつ子さん）から伺った話である（二〇二〇年四月）。調査あるいは修理中の仏像のプリント写真は、意気投合した二人の関係から辰巳旭が撮影した可能性がある。多くは、彼の論文・著作のなかで挿図として掲載されている。太田資料には、それ以外にも修理前の仏像の古写真があるが、数は少ない。

#### ◆仏像研究四〇年

さて、太田の仏像研究者としてのユニークな足跡は、彼自ら多くの著作物に書き留めており、全貌は彼の三冊の著書で知ることができる。ひとつは『仏像研究三十年』（昭

和四〇（一九六三）年七月、綜芸舎）である。これまでの旧稿を再録するほかに、自己の業績について①単行本・個人誌、②学術雑誌・新聞等発表、③古文化財に関する主な新発見と研究の三項目に分けて整理し、「三十年の記録」として記録し、さらに太田が直接関わった「新発見新紹介」の仏像・仏教工芸品一三六件余りのリストを掲載する。この出版は太田五一歳の時であった。あとの二冊は『仏彫 太田古朴作彫目録』（昭和五一（一九七六）年、綜芸舎）と『美佛参籠』（昭和五三（一九七八）年、綜芸舎）である。前者は太田新作仏像目録で、巻末に年譜（昭和五一年まで）を載せている。後者は昭和五二年、「日本人の心ふるさと奈良の研究紹介に尽くされた功績は顕著で」あるとして、奈良市表彰の栄誉を受けた時の記念出版である。この時太田は六三歳。それには、「三十年の記録」後の足跡が補充するかたちで載せている。孤高の道を歩んだ彼の足跡は、これら三冊に凝縮されている。

#### ◆太田流の調査

昭和二〇年から三〇年代にかけて行われた太田の仏像修理および研究の成果は今日、学術的に高く評価されるものが含まれている。しかし、当時からその調査や発表の経緯について、研究者としてよりも、むしろ仏像修復家としての性格が強く表に出ていたこともあって、他の研究者から慎重な調査が望まれるという声が挙がっていた。かつて文化財保存行政に携わった筆者の経験からみても、もし、公的立場にある研究所の技官や、国（当時は文化財保護委員会）の調査官ないし県の技師らとの協力体制が敷かれていたら、と悔やまれる。しかし、太田の仏像修理の時期は、今日（二一世紀）のデジタル配信の時代とはまったく異質であり、国レベルでは旧国宝保存法から文化財保護法へ移行し、さらに重要文化財指定が活発に行われていった時期であって、また戦後復興から高度成長期へと劇的な変化を遂げていく社会状況であったことは承知しておくべきだろう。ともあれ、太田の修理調査の評価については、なお議

論が尽きないものの、今日の学術的視点からみれば、彼の研究によって仏像の製作年代、あるいは納入文書の重要性が高まった事例が少なくないのは客観的事実であろう。

#### ◆納入状況の図解

太田資料のなかには、像内の納入状況を撮影したプリント写真はごくわずかであり、着工から竣工までの写真記録は完備されていない。また修理日誌類に当るものは、断片的な記載に止まるといつてよい。誤解を恐れずに言えば、納入状況についての彼の文章は、自身の記憶から綴られたかと推測されるのである。

しかし、筆者が特に注目したいのは、彼が修理した仏像の修理図解、なかでも修理中に知り得た像内納入品の納入状況の図面化された記録である（本展出陳資料では図6、12、18に当る）。前述したように納入状況を撮影したプリント写真の存在が分からないので、どの程度の客観性および信頼性が太田の図面に保たれているのか、大きな疑問を抱いたのである。ところが、太田資料のなかには、像内納入品の納入状況について大学ノートなどに納入品の寸法を詳細に記す箇所があって（図13）太田の図面（または図解）は一応の信頼性が担保されていると気づいた次第である。それは概念的図面ではあるものの、納入状況を示す方法としては、文章よりも有効であるのはいうまでもなく、視覚的理解に優れている。図示された内容はよく整理されており、簡略化かつ要約化される方向でまとめられたものである。したがって図面を見るの方が注意を払うべきものであって、大局的には彼の図面作成の基本姿勢は、実証的研究の精神に通じるものである。

#### ◆太田図面の再評価

今日、X線CTスキャンで像内を撮影し像内納入品の画像を読み取るといった手法が確立している。そのようなX線CTスキャン画像の分析は情報量が多く、精度が高いものの、基本的には太田作成の図面（像内納入品の納入状



況)の理解と同じ地平にあるといえないか。太田図面は、太田ひとりの個人的所見であるけれども、X線CTスキヤン画像の読み取りは、かつて太田が試みた理解の仕方と合致するもので、太田の図面はその先取りのな性格を持つといえようか。太田が作成した図面は、学術書として定評のある『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記編』に掲載されており、基本資料に準じる扱いがなされている。つまり、太田作成の図面は前述したように、それを利用する者の方で注意を払うべき資料であり、X線CTスキヤン画像の読み取りもまた、太田の図面と同じように、圧倒的な情報量を整理してから、要点を押さえて記憶されるのではなからうか。これを要するに、太田が作成した図面、すなわち仏像納入品の像内納入状況の図解は今日、再評価すべき学術資料と考える次第である。

注

- (1) チラシはA4サイズ一枚、画面印刷。表題は「奈良町の昭和の仏像研究家 太田古朴―仏像修理を中心に―」。展示期間は令和二年(二〇二〇)三月三日から四月五日まで。計画より一週間延長した。
- (2) 奈良県内では金峯山寺聖徳太子像(吉野郡吉野町)、伝香寺地藏菩薩像、円成寺聖徳太子像、東大寺中性院弥勒菩薩像および興善寺阿弥陀如来像(以上、四軀とも奈良市)などが太田の修理によって学術的評価が高くなったといえるだろう。詳細は「第一章 太田古朴の仏像修理とその成果」に記載。
- (3) 伝香寺の地藏菩薩像の修理一件についてここに記しておきたい。太田の著作に自身の弁明に似た一文があるからで、それを参考にしながら筆者の所見も加え、以下に紹介する。本像は明治三十九年旧国宝指定。修理(修理前の調査)は昭和二四年一月二七日に着工。施工は太田古朴。翌二八日に像内納入品を検出した。太田は、「解体にあたっては、奉籠物とその状態の正確な計測、記録に万全の注意を払い、写真撮影を行った」と回顧する(『仏像三十年』五頁、一九六五年刊)。なお太田資料にある「重要文化財/木造地藏菩薩立像 志願/修理報告書」(提出資料の控)には、「一、解体・実測・調査/本

鉢/首柄ガズレ、胎内ヨリ諸種ノ奉籠物ヲ昭和廿四年十一月廿八日/ニ発見サレ、別ニ保存サレテアル。」(〃は改行を示す)とあり、納入品の取り出し方が具体的に記されていて、興味深い。太田は本像の製作年(安貞二年(一二二八))と納入品の概要について、翌二五年六月、『史迹と美術』誌上で報告した。

先に紹介した「修理報告書」などによると、昭和二五年九月四日、本像は像内納入品および聖観音像を加えて、改めて修理が続けられたようである。また同資料中の「重要文化財/傳香寺宝物修理工事報告書」によると、別途に本像厨子の製作などが追加されており、請負は奈良古文化財保存技術者連盟(会長北河原公海)、工事主任は吉川政治、これに彫工として太田古朴は参加したことが分かる。竣工は同年二月一〇日である。当時の吉川政治の履歴をみると、「昭和一七年奈良美術院長(マ)、二二年奈良重要美術品等調査委員、二六年奈良県文化財保存課主事」(奈良新報社長奥田信義編纂『現代人物誌第拾七編』東亜出版協会、一九五三年八月)であったことが分かる(本情報は奈良市文化財課石田淳氏の協力を仰いだ)。いま記した本像修理完了の実際上の具体的な経緯については再検証すべきと思われる。

なおまた別保管された像内納入品は、発見から一〇数年を経て、昭和三九年(一九六四)一月追加指定された。

(4) (注3)で記した伝香寺の地藏菩薩像の像内納入品の納入状況については、太田の機知に富んだ図面が作成されている。それは、製作当初の納入の意図が非常によく分かるように図解されたものである(図12)。詳細は次の通り。頭部には舍利壺(青瑠璃製、舍利三粒)と薬師如来像(木造、素地)があり(仏法に当る)、胸腹部には経典類、すなわち般若心経・細字法華経・解深密経、願文(尼妙法・尼唯心・仏子貞隆(各一通)、結縁校名(一通)経典類があり(法宝に当る)、左足大腿部には十一面観音像が奉籠されている(僧宝に当る)。これらの納入品を像内から取り出す時、太田はそれぞれの納入箇所を見落とさず、図面に反映させたのである。さらに、太田は納入願文の記載を読み込んで、本体像と納入品は春日四社の本地仏と対応関係にあり、本像がいわゆる春日地藏として神仏習合思想を象徴する遺品であることを強調した。

・「伝香寺裸体地藏立像と胎内奉籠物」(『史迹と美術』二〇三、一九五〇年六月)

・「日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇四(解説)」(中央公論美術出版、二〇〇六年二月)の「122地藏菩薩像 奈良市小川町24 伝香寺」の項(一〇九頁)。

(5) 蛇足になるが、長く所在不明だった金峯山寺の聖徳太子像の納入品(所在不明分)について近年再発見され、追加指定されたので以下に述べる。本像は昭和一七年(一九四二)、太田の調査によって像内から経巻四卷(無量寿経三卷と阿弥陀経一巻、文永一二年奥書)、経筒(竹製)および直刀(木製)が発見され、太田が報告した。昭和二五年九月、太田による再調査で、像内から舍利塔(銅製)一基等が見つかった。昭和四四年、奈良県指定文化財として本像が指定され、納入品のうち、舍利塔のほかに摺仏(文殊菩薩、地藏菩薩、大黒天)残欠および法華経(版刷)残欠などが附(つけたり)指定された。しかし製作年代を示唆する重要な経巻四卷が直刀(木製)・経筒(竹製)とともに所在不明のため、指定対象にはならなかった。平成二年(一九九〇)六月、国重要文化財となったが、納入品は県指定台帳に準じた。平成二七年(二〇一五)、当該の経巻四卷(後日、無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経および阿弥陀経・無量寿経各一巻と判明)と経筒(竹製)が当山本坊から検出され、平成三〇年(二〇一八)一〇月、当該重要文化財の附指定に加えられた。その後の保存修理を経て、平成四年名称及び員数が整備された。さらに寺内調査が進んで、まだ見つかっていなかった「直刀」が再発見され、本年(令和六年)に「木製棒」として追加指定の手続きがなされると聞く。これによって所在不明の納入品はすべて確認できた次第である。太田の調査・発見から八〇年余りが経過した現在、風聞や憶測は完全に払拭されることになった。太田古朴にとって一快事であろう。

・「金峯山寺の聖徳太子立像」(『史迹と美術』一二五、一九四一年四月)

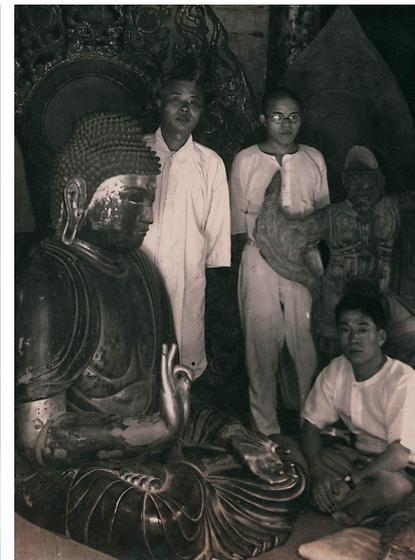
・「金峯山寺聖徳太子像と納入遺物」(『史迹と美術』一四五、一九四二年二月)

・『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇一二(解説)』(中央公論美術出版、二〇一六年二月)の「聖徳太子及び二童子像 金峯山寺所蔵」の項。

(すずきよしひろ/奈良国立博物館名誉館員)

一章 太田古朴の  
仏像修理とその成果

① 太田古朴について(1~5)



2-1 太田古朴写真(後方右)



2-2 太田古朴写真

※大田古朴の略歴については本書鈴木論文、略年譜参照。

② 金峯山寺聖徳太子及び二童子像(6~11)

鎌倉時代 文永十一年(一二六四)

木造・彩色・玉眼

像高 聖徳太子一五九・一(単位cm、以下同じ)

左脇侍一〇九・七 右脇侍一一一・八

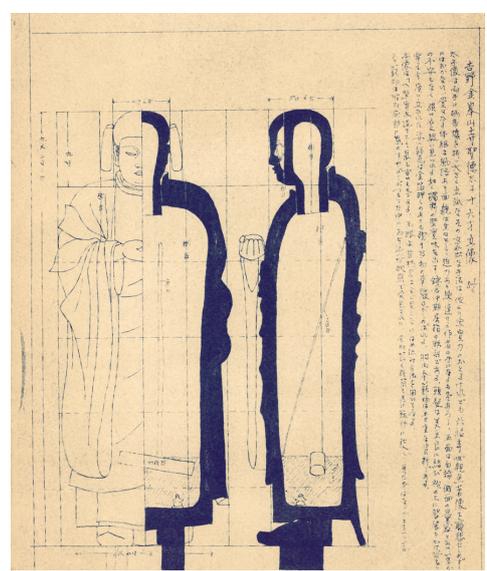
中尊は両手で柄香炉をささげ持つ太子像。左右の脇侍は角髪を欠失、持物を捧げる。中尊の像内納入経の奥書に年紀があり、文永十一年ごろ、三尊一具として造立されたと推測される。

大田古朴の調査によって見出された像内納入品のうち、舍利塔(銅製)一基、摺仏(文殊菩薩、地藏菩薩、大黒天)残欠、および法華経(版刷)残欠などが先に県指定、後に重要文化財に指定された。近年、経巻四卷(無量寿経、阿弥陀経など、文永十一年奥書、経筒(竹製)および直刀(木製)が寺内で再発見され、追加指定された(詳細は鈴木論文参照)。発見当時の経巻の写真と経巻等の納入状況の図解【6】は今日、貴重な学術資料である。

明治初期の神仏分離令および廃仏毀釈のため奈良・吉野山は大混乱し、その荒波の中で、本来一具であったとみられるこれら三尊、すなわち中尊と両脇侍像は分離され、大正四年(一九五五)両脇侍像が「木造童子立像(伝普成、普建)」の名で国指定となった。中尊の方は前述した通り、昭和四四年(一九六九)に県指定、平成二年(一九九〇)に国の重要文化財となった。

太田古朴は早くにこれら三躰が三尊一具の構成をなすと説き、さらに寺内にあった二比丘像を加えて聖徳太子五尊を提唱した。今日の研究では聖徳太子三尊の可能性が支持されており、太田作成の三尊図【8】は早い段階でその可能性を提示したものと学術的に意義深いといえよう。

(鈴木)



6 聖徳太子像納入品納置状況図



7 聖徳太子立像写真



8 聖徳太子及び二童子立像復元図



③ 伝香寺の地藏菩薩立像 (12~16)

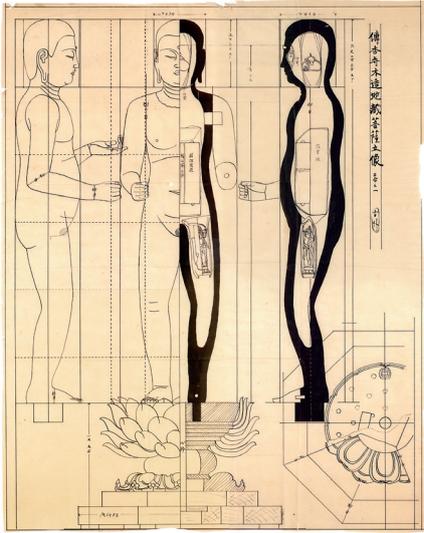
鎌倉時代 安貞二年(一二二八)  
木造・彩色・玉眼 像高九八・二

「はだか地藏」(『奈良晒』)といわれ、毎年七月の地藏盆の時、新たな法服に着せ替える仏教儀礼が行われる。鎌倉前期の穏健な写実的作風をあらわす。もと興福寺の福園院伝来。

昭和二四年(一九五九)から翌年にかけて太田古朴によって調査・修理され、像内納入品が確認された。鈴木論文の注記4に記されている通り、頭部には舍利と薬師如来像、胸腹部には経典類、左足大腿部には十一面観音像が納入されており、その状況が分かる図面が太田によって作成



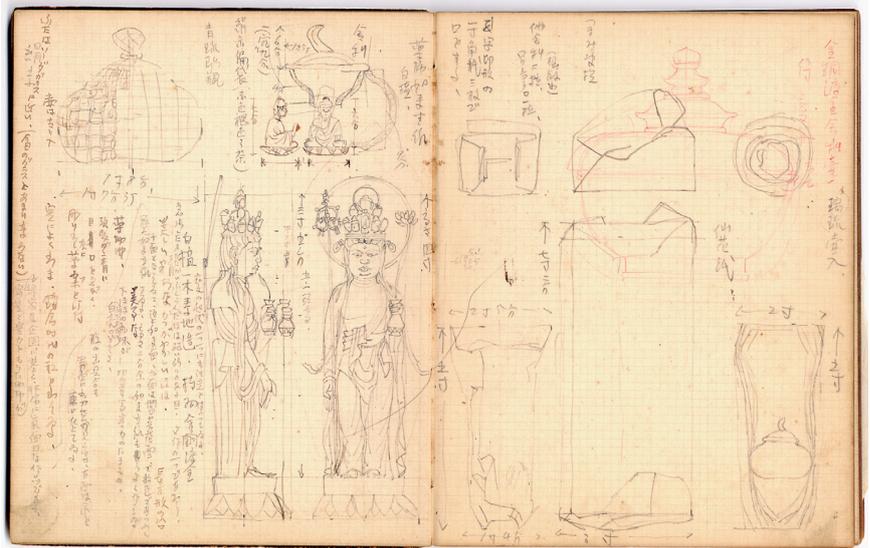
参考1 地藏菩薩立像  
(伝香寺提供・飛鳥園撮影)



12 地藏菩薩立像納入品納置状況図



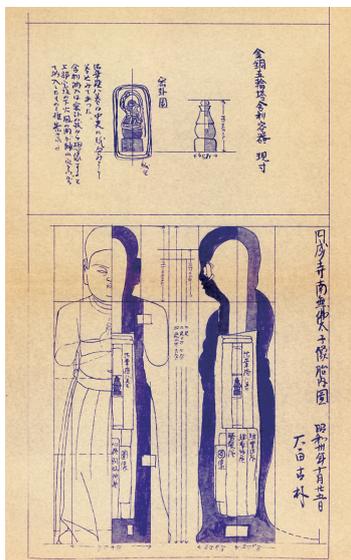
16 地藏菩薩立像納入品写真



13 仏像調査ノート(その1)



20 南無仏太子立像写真



18 南無仏太子立像納入品図

聖徳太子二歳の像。合掌して東を向き「南無仏」と唱える場面の姿である。納入経の奥書から延慶二年作と判明。納入品の発見は昭和三〇年(一九五五)一〇月(太田古朴調査)。同四〇年(一九六〇)五月奈良県指定文化財。そ

④ 円成寺の南無仏太子立像 (17~20)

鎌倉時代 延慶二年(一二三〇九)  
木造・寄木造・彩色・玉眼 像高六七・八

された【12】。この太田自筆の模式図は今日、X線CTスキャン画像から読み解く納入品の納入状況の理解と合致するアイデアであり、重要である。  
納入品のうち舍利と胎内仏、および本鉢像の信仰は、中世・南都に広がった、春日社を中核とした神仏習合の思想が反映している。すなわち、舍利(釈迦)は一宮、薬師如来像は二宮、本体像の地藏菩薩は三宮、十一面観音像は四宮の春日社本地仏に相当するものである。要するに、本像はいわゆる春日地藏の一事例としての意義を持つ。(鈴木)

の後吉川政治によって修理された。

銅製五輪塔一基、經典九点（法華經八卷、維摩經・勝鬘經・般若心經・大方広仏華嚴經・仏説消除疫病神呪經など各一卷）、五大明王の墨画、如意輪観音の摺仏、両界曼荼羅（版本）などが像内にぎっしりと納められていた。太田作成の納入図解【18】によると、下方に維摩經・勝鬘經などの経巻類を縦にならべ、その上に五輪塔を取り囲むようにして法華經八巻を縦にならべ、その上に二点の折り紙をのせる。これに対して、その後の修理の所見から、二点の折紙は図像類であると判断する見解がある。

〔参考文献〕「大和円成寺光堂本尊と南無仏太子像」（『史迹と美術』二五八、一九五五年二月）（鈴木）

### ⑤ 東大寺中性院の弥勒菩薩立像（21～23）

鎌倉時代 建久四年（一一九三）  
木造・寄木造・漆箔・玉眼 像高一〇二・七



21 弥勒菩薩立像図面



23 弥勒菩薩立像写真

本像は昭和七年（一九三二）修理（奈良美術院）。戦

後、吉野地震で破損したため太田古朴が小修理（昭和三〇年／一九五五）。昭和初期の美術院の修理で確認されていた納入経は、棒状に固化していたが、同年に改めて取り出されて開封。切れ切れとなった断片を研究した小林剛（のちに奈良国立文化財研究所長）によって弥勒上生経の一部と確認され、本像を弥勒菩薩と名付けた。奥書の年紀も確認されたが、太田古朴はこれを「建久四年」と読むが、他の研究者は「建久□年」とする。昭和三二年重要文化財。

〔参考文献〕「東大寺中性院の推定快慶作観音立像」（『史迹と美術』二六八号、一九五六年二月）、『仏像研究三十年』（一九六五年七月、総芸舎）（鈴木）

### ⑥ 興善寺の阿弥陀如来立像（24・25）

鎌倉時代  
木造・一木割製造・玉眼・金泥彩 像高九九・〇

鎌倉時代の仏師快慶の阿弥陀如来立像の表現を踏襲した来迎阿弥陀。奈良市東山中の「東山内田原」の寺庵に伝来し、天正七年（一五七九）頃、興善寺の創建時に寄進されたと推定される。

昭和三七年（一九六二）太田古朴によって修理された。修理開始直後に像内納入文書が発見され、体部左側の内割り面から取り出された。この納入文書は結縁校名状であり、阿弥陀如来像の製作にあたり、本像に結縁した人々の名前一五四八名を記したもので、別に漆塗りの筒形納骨器も取り出された。

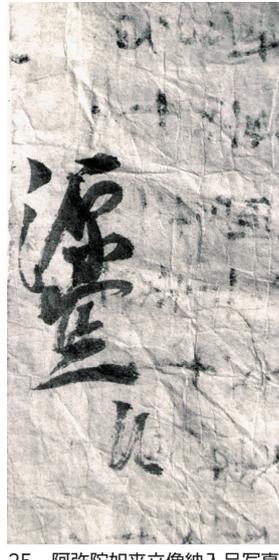
結縁校名の文書は消息（手紙）の紙背を再利用したものであった。歴史家の調査によると、この消息は、源空（法然上人の諱）や証空らが奈良に住む門弟「正行房」に宛てた、それぞれ自筆の書状であることが分かった。法然上人直筆の消息はそれまで皆無であり、また証空上人の真筆は稀とされてきたので、これらの消息は断片とはいえ、重要な発見であるとして当時、世間を賑わした。



24-1 阿弥陀如来立像写真



24-2 阿弥陀如来立像写真



25 阿弥陀如来立像納入品写真（法然署名）

当寺本尊の納入品の発見は昭和三七年四月であったが、昭和四〇年（一九六〇）五月、これら源空等の消息が国文化財保護審議会の古文書部門で重要文化財に相応しいとして指定されることになった。併せて本尊像は納入品発見の経緯を踏まえ、「消息」案件の附指定となった。国指定の名称は次の通りである。

「源空、証空等自筆消息 二巻」

紙背結縁交名  
附、木造阿弥陀如来立像 一軀  
漆塗筒形納骨器 一箇

〔参考文献〕「奈良興善寺本尊阿弥陀立像と胎内発見の造像及び法然文書」（『史迹と美術』三二四、一九六二年五月）、『美佛参籠』（総芸舎、一九七八年一〇月）（鈴木）



## 太田古朴が見た山里の文化財

— これからの文化財保護へのまなざし —

大河内智之

### ◆ 高野町細川の八坂神社と傘鉾祭

高野山奥之院に源を発する不動谷川の上流域、高野町細川地区は、およそ南北三・五km、東西三kmの範囲に、谷に沿って民家が点在する。江戸時代後期の地誌『紀伊続風土記』によれば神谷辻・裏神谷・池峯・中村・東細川・西細川の集落があり、合わせて家数七五件、人数三〇四人と記される。昭和三年（一九二八）に高野山電気鉄道（現・南海高野線）が延伸して集落の遙か上の斜面に紀伊細川駅が設けられ、山中にあつて往來の利便がよく、現在の人口はおよそ七〇名ほどを保っている。

東細川（中村）の集落に、産土社である細川八坂神社がある。水量豊富な清流の向こうに社殿と阿弥陀堂が並び建つようすは別天地の趣で、かつて牛頭天王社とよばれた神仏習合の景観が今日に継承されている。神社の棟札には西南院や蓮上院の名がみられ、高野山麓の他の村々と同様に、かつて高野山上寺院との深い関わりのおかげで村の信仰の場が形成されてきたことをうかがえる。

八坂神社では毎年八月一六日に細川の傘鉾祭が行われている。頂上に龍を載せた大きな傘に幕を張り、その中に隠れながら移動した鬼が社頭で祝詞を奏上したのち、参詣者の間を竹笹を振りながら巡り邪気をはらうもので、最後に外した鬼面を集まった地区の人々にかざして加持をしてみわる。雅やかな風流傘の祭礼と、疫病を防ぐ牛頭天王の威力の発揮を組み合わせた祭礼となる。

この細川の傘鉾祭で使用される鬼面【31】は、広葉樹の一枚製で、身を赤く塗り（水銀朱）、額には先が二股に分かれた角を二本あらわし、眉には凹凸を設け、目を大きく見開き、牙と歯をむき出しにして威相を示している。特徴

的なのは突き出た鼻を上へ曲げ、先を膨らませた鼻孔を長く開けた表現で、類似した南北朝時代の鬼面が、やはり高野山麓のかつらぎ町花園中南の上花園神社に伝わっている。造形も自由で萎縮のない表現は中世仮面の特徴で、この鬼面の制作時期も南北朝時代から室町時代前期ごろと推定される。

面箱【32】の蓋裏墨書銘から宝暦五年（一七五五）の段階で牛頭天王面が二面伝来していたことが分かり、おそらくは青鬼の面もあつたとみられる。本来は修正会や修二会で使用された鬼面が、中世末から近世になって現在の芸態へと変容したのであろう。高野山周辺では、天野社（丹生都比売神社）旧蔵、東京国立博物館所蔵の正和二年（一三三三）銘赤鬼・青鬼が確認され、かつて鬼の芸能が盛んに行われていたことをうかがえる。

鬼面は部材が割れるなど痛みが目立ち、他の祭礼用具も損傷が進んでいたため、文化庁による民俗文化財伝承・活用等事業費国庫補助を受け、傘の幕（松鶴堂製）、龍（吉田生物研究所製）の復元・修理とともに、面打師久保博山氏によって鬼面が新調された。令和五年（二〇二三）八月一六日、地区住人が参集する中でそのお披露目が行われ、復元・新調された道具によって傘鉾祭が執り行われた。さらにその後、これら傘鉾祭の道具は、令和六年三月四日に和歌山県指定有形民俗文化財に指定された。

### ◆ 細川八坂神社仮面群の再発見

ここに見た、傘鉾祭で使用される鬼面を調査したのは平成二七年（二〇一五）七月のことである。その際、山中喜代美宮司より、かつて先代宮司のころには他にも仮面があつたが行方不明となつていたことをうかがつた。宮司の手元に、平成八年ごろに撮影したビデオ映像（撮影・高野町林ラジオ電気店主）からキャプチャーした写真があり、一目見て驚いた。そこには、制作時期が中世に遡る翁・三番叟・父尉・延命冠者からなる翁系面四面と、やや素朴な造形の能面など計八面が写っている。

これら所在不明の仮面について、先行する学術情報の有無を確認したところ唯一たどり着いたのが太田古朴『美仏参籠』【26】であつた。同社境内に隣接して建つ阿弥陀堂の仏像修理の際に行った調査の知見として能面等七面（八面の誤り）が存在することを伝え、図版はないがそれぞれの法量とともに般若面には「慶安二年 ニシホソカワ 想吉キシン」、古面とするものには「西細川宮之常住 寄進池之谷 茂兵衛」と銘記があることも報告されていた。この情報によつて、確かに仮面群の存在を確かめることができた。

現宮司によれば、先代宮司がどこかに預けたいという話をしていた覚えがあるとのこと、寄託を受ける可能性のある施設や教育委員会等に照会を行った手がかりを得られないままであつた。そんな中、先に記した細川の傘鉾祭の道具類を国庫補助を受けて復元・新調するにあたり、関連資料の総体的な把握を行うため、令和四年（二〇二二）六月に和歌山県教育委員会文化遺産課の藤森寛志氏と松原瑞枝氏が神社の土蔵内を調査していたところ、仮面を納めた木箱が発見されるに至つた。灯台もと暗しではあつたが、まことに喜ばしいことであつた。

太田古朴の調査・報告ののち、先代宮司はその仮面の重要性を認識し、折に触れて見学にも供し、そしてよりよい保管場所を検討していたこととなる。町も県も把握していなかつた仮面群は、太田古朴の調査で所蔵者の意識や行動の変容をもたらしていたといえるであろう。この太田古朴による細川地区文化財調査がいかなるものであつたか、確認したい。

### ◆ 太田古朴による細川地区文化財の調査・修理

『美仏参籠』【26】の「仏像研究四十五年」の章に、「四、高野町細川の仏像」の項があり、冒頭「区長新谷伝治氏が本堂の環境整備等に意を注ぎ、私に仏像の調査の話があつて、村内の仏像、阿弥陀、薬師、千手、十一面、地藏等十体を調査修理することができた」とある。調査期間

について本文に記載がないが、昭和五二年四月に細川区長に提出した細川地区仏像修理報告書【27】中の図面注記に昭和五〇年（一九七五）一月二日から翌五一年六月一日までの日付が確認でき、また阿弥陀堂千手観音像の修理時期を昭和五〇年七月二〇日～八月二五日と記し、本尊阿弥陀如来坐像修理を同一〇月（台座修理銘による）に行っていることから、昭和五〇～五二年のこととみられる。

『美仏参籠』【26】によればこの調査に際して細川地区で確認されたのは仏像・神像二一件（一四軀）と仮面八面である。このうち阿弥陀堂本尊の阿弥陀如来坐像【29】は、「一見藤原様式の感じではあるが、体格の強く表現した太い木割りを見せている。面相はひきしまり、衣文は胸前で強く肩に引きあげた形につくり、右手左足の写実的表現に鎌倉前期らしさを端的に見せている」として、太田独自の木割りと造像年代を相関させる視点や、自らの様式観に基づく見解を示している。

筆者が平成二七年に調査した際の所見を次に示す。本像は像高八六・七cm、来迎印を結び、衲衣、裙をまとして、右足を上にして結跏趺坐する。頭体通して一木より木取りし、耳後を通る線で前後に割り短ぎ、内割りを実施して、頭部を三道下で割り放す。左肩より地付き部にいたる一材、右腰の三角形の材を短ぎ寄せ、右手上膊、前膊、手先、左手袖先と手先を別材製とする。両脚部横一材製。像表面は錆下地を施し、漆箔仕上げとする。整然と並べた小粒の螺髪、伏し目がちで頬の丸い穏やかな面相表現、肩の丸い円満な体型、厚みの薄い側面観、緊張を解いた座り姿、浅く流麗な衣紋線など、なお定朝様式の影響が色濃い。太田は鎌倉時代に入るとみるが、平安時代末期、一二世紀後半の造像と想定される。

平安時代末期か鎌倉時代初期か判断の難しい作例であった、筆者の見解は太田の見解とは違えるものの、高野山上に伝来する同時期の如来坐像とも傾向を同じくする堅実な出来映えの作例であり、造像にあたっては高野山僧の直接的な関与があったと想定される。

太田による細川地区仏像修理報告書【27】・写真アルバム【28】によれば、外れていた右手肘から先と両脚部材をマチ材を足して緊結し、破損していた台座は内部に補強部材を組み込み全体を再結合し、框を新造して安定させる堅実な修理を施している。またこの調査・修理に際して把握された台座の銘記を記録に残している【26】。台座天板に「東細川中村／天王山／薬師堂／応雅／中村岡本／惣重郎／神谷溝口／庄作／西村小川／新二郎／神谷新屋／仁助／正徳元辛卯天／右仏阿弥陀時代不知／大座後光／六月吉良辰／開眼供養者／七月七日／大仏師高野山九兵衛」、そして旧天板部材に「阿弥出作時代不知／紀州伊都郡東細川中村阿弥陀／座後光再興者／正徳元辛卯年／六月吉日／天王山薬師寺／阿闍梨／応雅代」と記し、正徳元年（一七一）の修理を確認できる。天王山薬師寺は八坂神社（牛頭天王本地仏は薬師如来）の別当寺とみられる一方、住僧応雅が「東細川中村阿弥陀座光再興」と記すように阿弥陀堂は別当寺から独立して村に帰属することがうかがえ、細川村住民が結束する場として自治・管理する村堂であったといえる。現在も同様に同堂は区（自治区）の管理であり、地域の信仰の場を復元的に検討する上で、重要な情報といえよう。

銘記を確認できる作例としてはほかに薬師如来坐像【30】があり、その像底に「寛文十一年／妙円禪定尼大菩提也／五月廿二日 長衛門／大仏師／作 定慶」、台座框に「大坂平野町七丁目／大仏師定慶 大貳公、厨子裏面に「奉新営薬師如来厨子一字／庄中以助力建立之乎／興隆仏法寺内安全信心施主／願望成就 如意祈処／于時元禄第十六癸未天八月十五日／本願主／東細川庄天王山薬師寺／現住／阿闍梨応雅／敬拜／高野山小田原大仏師市左衛門造之」の各銘記を報告する。寛文十一年（一六七二）定慶の作で、元禄一六年（一七〇三）に高野山小田原仏師市左衛門により厨子が作られている。

もう一軀、千手観音立像【31】の台座框には「調進／新上西門院儀／三七日御忌日仏／千手観音菩薩／正徳二年辰

五月十八日／大仏師／法橋康寿」とあって、正徳二年（一七二二）に七条仏師の康寿により新上西門院（一六五三～一七二二、俗名藤原房子、霊元天皇中宮、東山天皇養母）忌日供養の像と分かる。現状仏師名以外は墨消しされているが、山里にこうした皇室に関わる仏像が伝来するのも、高野山上と山麓を含めた文化圏における法宝物の往来という観点からは不思議なことではない。

太田による修理と調査は細川阿弥陀堂のほか細川神谷阿弥陀堂の阿弥陀三尊像、細川一間堂地藏菩薩立像二軀、下井関信市氏所蔵地藏菩薩立像（後述）、細川八坂神社神像（二軀）、そして先述の仮面八面に及んだ。おそらく区長主導のもと、細川地区全体の主要な文化財が把握されたと推定され、図版はごく一部に限られたが、その銘記情報と法量、推定される制作時期が太田の著書によりただちに公刊されたことになる（昭和五三年四月）。現区長が引き継いでいる資料の中には、細川地区仏像修理報告書【27】・写真アルバム【28】とともに『美仏参籠』【26】が含まれている。これら調査と修理と出版が地域の文化財の存在を住民が意識する機会となったことは想像に難くない。

#### ◆細川八坂神社の仮面群

『美仏参籠』【26】における細川八坂神社の仮面の記述は少ない。先に見たように「能面等七面」（八面の誤り）として八面の寸法と銘記を記すが、改めてこれらの文化的な意義について確認しておきたい。

令和四年六月に細川八坂神社の仮面が再発見された後、同年九月に筆者と和歌山県教育委員会文化遺産課との合同調査として、高野町教育委員会職員、奈良大学学生・大学院生とともに調査と撮影を行った。最も注目されたのは翁・三番叟・父尉・延命冠者の一具の翁系面である。各面の詳細を示しておきたい。

翁【34】は面長一七・五cm、面幅一三・八cm、面奥六・七cm、額に冠を表して、目をへの字に表し、笑相として歯を出さない。切顎。額、頬、頬骨脇、顎に皺を表し、目尻



をやや上にゆり上げる。眉を描き、顎髭を植える（亡失）。顎を含めて、広葉樹（キリカ）の一枚より彫出し、顎は鋸曳きにて切断する。白下地を施し、肉身色はやや赤みを帯びる。蛍光X線分析によりカルシウムと鉄が検出され、下地が胡粉、赤色はベンガラと判断される。眉に一部墨描きあり。唇に朱（水銀朱）を施す。冠は墨。面裏は素地とする。

三番叟【35】は面長一七・三cm、面幅一三・三cm、面奥六・九cm、額に冠を表し、目を笑相とする。額に眉状に逆への字形の盛り上がりを表す。鼻を向かって左に曲げる。切顎とし、歯を表さない。顎に植毛の跡がある（亡失）。広葉樹（キリカ）の一枚より彫出し、顎は鋸曳きにて切断する。表面の黒色に鉄が含まれ、鉄黒とみられる。唇に朱（水銀朱）を施す。面裏素地とする。

父尉【36】は面長二六・六cm、面幅一三・八cm、面奥七・一cm、額に冠を表し、目を見開いて目尻を釣り上げる。切顎とし、歯を表さない。額、頬、頬骨脇に皺を表す。顎を含めて広葉樹（キリカ）の一枚より彫出し、顎は鋸びきとする。表面彩色は翁【34】と同じ。現状、左目上、両頬骨、唇に赤色（ベンガラ）の顔料を補う。面裏は素地。

延命冠者【37】は面長一六・六cm、面幅一三・三cm、面奥六・八cm、額に冠を表し、目を笑相とする。眉を描き、頬にえくぼを表す。口をわずかに開き、上歯を表す。顎髭を植える（亡失）。広葉樹（キリカ）の一枚より彫出す。表面彩色は翁【34】と同じで歯と顎ひげに墨を施す。現状、鼻先、頬骨、口周辺、えくぼ周辺に赤色（ベンガラ）を重ねる。面裏素地とする。

父尉と延命冠者には、後世に頬や口まわりに赤い補彩を塗り重ねて滑稽性（あるいは呪術性）を強調しているが、四面とも大きさを作風、面裏の処理は統一されたもので（裏表紙参照）、用いられている材料や表面彩色の顔料も共通する。近世の能面に見られるような固定化された様式ではなく、自由度の高い生彩ある表現を示している。一四

一五世紀の翁系面の基準作例は乏しく、制作時期の判断は難しいものの、室町時代前期に遡るとみられる。

能における翁は、現行においては翁と三番叟、そして千歳の三人が登場し、仮面は翁と三番叟のみが使用する。しかし翁は古くは式三番とよばれ「父尉」「翁」「三番猿楽」の三つの演目からなっており、このうち「父尉」の演目において用いられたのが父尉とその子とされる延命冠者の面となる。式三番における「父尉」は室町時代前期には行われなくなっていく一方で、そのため翁や三番叟に比べ、父尉や延命冠者の残存事例は少ない。なお翁の特殊演目「父尉延命冠者」としては残り、また兵庫県上鴨川住吉神社の神事舞や車大蔵神社の翁舞では古式の翁の名残を伝えて現在も使用される。

細川八坂神社の翁系四面（15頁挿図1）の重要性は、一具同作であることよって、式三番のうち父尉が廃絶する前に製作された可能性が高いこと、そして高野山麓において室町時代前期に古式の翁舞（式三番）が行われていたことを具体的に示す貴重な事例であることにある。

ところで筆者は、高野山麓においてもう一組の、一具の翁系四面を把握している（15頁挿図2）。慈尊院（九度山町）が所蔵する勝利寺伝来の翁（図版左上）・延命冠者（同右下）と、上花園神社（かつらぎ町）が所蔵する三番叟（同右上）と父尉（同左下）の合計四面で、作風や用材の一致とともに、蛍光X線分析による顔料調査でも、一具の制作と考えてよい結果を得られた。後世、二面ずつに分蔵されてなお、四面ともに継承されたのは奇跡的なことといえる。この事例も含めて、高野山麓では翁系四面のセットが二組も確認できたことになる。

かつて高野山麓では、山上の僧侶たちも深く関与してさまざまな仮面芸能が営まれていたことが、残存する仮面や古文書からうかがえる。その中心となったのが丹生都比売神社（天野社）の舞楽や猿楽、御田舞であり、ここにも父尉（南北朝時代・かつらぎ町指定文化財）が伝わっており、かつては古式の翁舞（式三番）が行われていたと推測

される。室町時代後期ごろにおいては高野山麓で吉野の楡垣本猿楽が活動している事例を把握できるが、それより遡る時期の翁舞（式三番）の高野山麓への伝播の背景がいかなるものであったのか、現時点ではまだ明らかにできない。しかし今回発見した一具の作例として現存最古級の翁系四面は、謎の多い翁という芸能の研究を進める上でも、重要な情報を提示するものといえよう。

その他の仮面についても確認する。鬼神面【38】は面長二六・〇cm、面幅一七・七cm、面奥一三・二cmの大型の仮面で、眉と眼をつり上げ、驚鼻で、大きな口に歯を見せ下唇を嚙んだ激しい怒りを出す。広葉樹の一枚より彫出し、胡粉下地を施して身の赤色は鉛丹。面裏に「西細川宮之常住／寄進／池之峯 茂兵衛」の墨書がある。眉根を寄せて瞼目する眼は神将形像にも通じるところがあり、高野山周辺資料では東京国立博物館の天野社旧蔵の緊那羅（鎌倉時代後期）が系統も作者も異なるものの、比較作例として挙げられる。およそ南北朝時代～室町時代前期ごろの制作と想定しておきたい。

もう一面の鬼神面【39】は面長二三・三cm、面幅一五・八cm、面奥一〇・〇cm、長方形の輪郭に大きく弧を描く眉、つり上げて見開いた眼と三角形の鼻を配し、上下に歯を表した大きな口は笑うように口端を上げる。広葉樹の一枚より彫出し、胡粉下地を施して、肉身の赤はベンガラ。眉、目の周囲、口ひげを墨。面裏は荒く彫って分厚く、素地仕上げとする。高野山周辺では類似資料を見ない素朴な造形で面裏の削りも小さな仮面であるが、同種の仮面としては九州地方の社殿や床の間の柱にくくりつける守護面がある。高野山周辺では上花園神社の仮面群を永禄五年（一五六二）に再興（修理と箱の新調か）した日州鶴戸山住僧（有鏡）の事例もあり、九州地方の僧が巡錫した際にもたらされた可能性も想定される。

残り二面のうち癒見【40】は面長一七・〇cm、面幅一三・六cm、面奥八・四cmの小ぶりの仮面で、額の中央を盛り上げ、眉根を寄せて眉尻を下げ、上目遣いと、口端を

への字に下げる。広葉樹の前後二材製とし、額中央と左顎付近で割損して現状接着される。胡粉下地を施し、赤色からは水銀が検出され、丹により彩色している。能面の癩見の系統ではあるが、定型表現からははずれ、小ぶりで滑稽性が強い。高野山周辺では室町・桃山時代の猿楽面（能面・狂言面）が多数確認でき、定型からはずれた自由な造型を示す作例が多く、本面もそうした中に位置づけることが可能であろう。

般若【41】は面長一九・四cm、面幅一四・三cm、面奥七・六cm、角を欠失して耳を表さず、眉根を寄せ、鼻をふくらませ、大きく開口して口端をつり上げ歯と舌を表す。ヒノキの一枚より彫出し、左こめかみに別材を矧ぎ寄せ（亡失）、右こめかみ付近は朽損する。胡粉下地を施し、肉身部はベンガラにて彩色する。瞳、歯に金箔を施す。面裏は素地とし、墨書にて「ニシホソカワ／慶安／二年／惣吉キシン」と記す。般若の定型表現からは外れることは先の癩見と同様であるが、慶安四年（一六五二）の寄進銘を確認でき、高野山文化圏における基準作例として位置づけられる。

これら仮面群が、高野山周辺における中世〜近世前期の仮面や芸能を考える上で重要な情報を提供していることはもとより、特に翁系面四面を把握したことについては、今後の翁（面）研究の上で高野山文化圏の芸能を視野に入れていく必要が生じてきたものといえ、その重要性を重ねて確認しておきたい。

### ◆下井関家の地藏菩薩立像

太田古朴『美仏参籠』【26】に、一点だけ個人所蔵の仏像がある。解説の全文を次に引用する。

「10 地藏菩薩立像 細川 下井関信市氏蔵  
檜材、一木造、真黒になつてゐる。

頭長高九寸（二七・三センチ）は先きのべたように、一搦手半、印度尺一尺二寸、曲尺九寸の大きさとも白毫高八寸の基本かどちらかにもとれる寸法である。

藤原時代の末の様式の古式地藏で衣文にしわを作らない。又腹部が平たく、乳と腹との間の広いのも藤原仏の特色と言える。素朴なよい地藏さまで、個人の持仏となつてゐるのは珍らしい。おそらく、薬師寺住侶が念持仏としたと推定される。」

太田はこのように本像を平安時代後期の制作と判断し、『美仏参籠』【26】の裏表紙（参考2）にも図版を掲示し、阿弥陀堂諸尊の銘記に見られた八坂神社別当薬師寺住僧にゆかりの作例と考えた。

筆者の所見を次に示す。像高二七・一cm、頭部円頂相とし、大衣・覆肩衣をまとい、左手屈臂して宝珠を執り、右手垂下して掌を前にして五指を伸ばして、裙を着けて直立する。像の全部をヒノキの一枚より彫出し、表面は古色仕上げとする。台座底面に墨書にて「和歌山県伊都郡／高野町細川七四六／下井関信市／昭和五十一年七月南都仏師太田古朴修理了」と記す。本体と台座の接合が不安定であったようで、像の足裏に薄板材を矧ぎ足し、丸棒にて柄を新たに設け、台座に柄穴をうがって立たせる措置を施している。

平明な面相表現で体の厚みの薄い体型は太田古朴の判断のように平安時代後期風を意識するものではあるが、顎の張った頭部、強調された三道の皺、立体感の後退した身体表現など、像全体としては定朝様式の影響は及んでいない。およそ室町時代後期から江戸時代にかけての制作と判断される。

細川八坂神社に隣接する下井関家は、東細川から高野山へと登る街道の起点にあり、登り口すぐには中世末〜近世前期ごろの石仏や一席五輪塔が並ぶ。こうした環境を踏まれば、本地蔵菩薩立像が個人宅に安置されることについても、その立地からは辻における地藏信仰の痕跡を継承している可能性がある。制作時期が太田の想定より降ることでの価値が減衰するのではなく、地域史理解の上で重要な情報を提供するものといえる。

本像は、同宅に住人がいなくなったのちも、そのまま仏

壇に安置されていた。親族が家の整理を行うに際して処分方法を検討していたところ、太田古朴『美仏参籠』【26】に掲載されていることを把握し、その重要性を鑑みて高野町教育委員会に連絡を取ったことで、所在が把握された。高野町教委の依頼により和歌山県教育委員会文化遺産課と筆者は令和五年五月三二日に同宅を訪問、調査・聞き取りの上、梱包して搬出した。所蔵者の意向により、今後、和歌山県立博物館へ寄贈される予定である。

本像が失われずに文化財行政とつながったのは、まさしく太田古朴の活動の結果であったといえる。一人の仏師／仏像研究家の活動は、半世紀の時を超え、山里の文化財の継承に紛れもない影響を与え続けている。

### ◆これからの文化財保護へのまなざし

現在、全国で仏像や神像など寺社に所蔵される文化財の盗難被害が発生している。被害の中心となつてゐるのは、その文化的価値を知られることなく、各地の集落に暮らす人々が心の拠り所として守り伝えてきた、身近に祀られる数多くの仏像等である。被害多発の背景には、地域住民の高齢化と人口減少という社会的構造的な問題があり、地域住民の自治の象徴として管理されてきた祠堂や祠が、コミュニティの縮小により担い手が不足して目が行き届かなくなり、結果的に犯罪の抑止力も低下しているのである。こうした状況は今後さらに深刻化していく。これからの文化財保護は、こうした現実の状況を踏まえながら進めていかなければならない。

改正文化財保護法（平成三十一年四月施行）では、第一八三条に文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画の策定が追加された。改正趣旨によればこれは「過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財の滅失や散逸等の防止が緊急の課題であり、未指定を含めた文化財をまちづくりの活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取組んでいくことが必要」としており、先の課題意識に対応する。なにより未指定資料を含めて地域社会総がかりで文化財保護に取



り組むことの必要性を明示したことは、文化財保護行政における大きな転換点といえる。

これからの文化財保護においては、地域の文化財をくまなく把握し、コミュニティの文化的象徴として、地域活力の向上につなげていく行政・住民（地域社会総がかり）の主體的態度が重要であることはもちろん、地域を局地的に捉えず広く多数の人々をつなぎ、ともに守り支える体制の構築が必要である。すなわち地域外の人々もまた当事者という意識を持ち、地域の歴史や文化財を維持継承している人々に敬意を表して、各地の文化財を「みんなの公共」で支え合う活動が求められているといえる。

そうした中において、自発的な調査・研究の能力、地域資源たる資料の収蔵・保管の機能、情報を共有化するための展示・普及の場やつながりを有する博物館はその中核となり得るし、地域が博物館施設を有しない場合は、その機能を分散して担うことは有効な方法である。例えば学術面での支援、広報・普及活動での支援、金銭的な支援などが想定される。

太田古朴の活動は、在野の修理仏師という立場から、自らの知見と技術を活かして文化財の価値を見だし、修理によって維持継承し、自らのメディア（論文・書籍・新聞紙面）を利用してその価値の共有化と魅力の発信を行うものであった。指定物件の修理では当時の文化財行政や博物館行政の人々と軋轢が生じることもあったが、南都の寺院や僧・神職と深く関わり、奈良仏像研究所や奈良石造美術研究会を主宰して同好の士を集め、古美術を愛好する人々への一定の影響を發揮していた。そうした活動により、価値を見いだされ、保護の措置が図られたものは数知れない。

細川地区の文化財調査・修理もその具体的な一例である。活動の中で特に重要なのは価値と情報の共有・拡散である。価値を知り、魅力に気づくなかで、文化財を継承する新たな動機が生まれる。翻って現代においては、インターネットの普及の中で、誰もが情報を発信し、人と人をつなげることのできる環境がある。文化財の維持継承への金銭

的支援へとつなげるクラウドファンディングの手法も大きく活用されている。地域に寄り添いその歴史と魅力を伝える広報・普及活動も、まぎれもなく文化財保護の一つである。現代においては誰もが文化財保護の主体となりうるといえる。

いまや地域の文化財は、所蔵者だけでなく、文化財行政だけでも守り続けることはできない。文化財を維持継承する新たな社会的資本（ソーシャル・キャピタル。信頼や規範、ネットワークなど、社会や地域コミュニティにおける人々の相互関係や結びつき）をいかに構築していくかが喫緊の課題となっている。仏像・石造物を深く愛好し、在野にあつて修理・研究を行い、人的ネットワークを築いて文化財の価値と魅力を発信し続けた太田古朴の活動は、文化財保護の現代的課題を解決するための、真摯なまなざしの一つを示しているように思われる。

注

- (1) 和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』（和歌山県教育委員会、二〇一五年）
- (2) 太田古朴『美仏参籠』（綜芸舎、一九七八年）
- (3) なお修理報告書の日付は昭和五十年四月とするが、一具となる写真アルバム【27】は昭和五二年四月であり、前者は脱字と判断される。
- (4) 太田古朴『木割法』（綜芸舎、一九六一年）。なお太田は本書の他に『造像法』（綜芸舎、一九六〇年）、「寄木法」（綜芸舎、一九六三年）、「一木法」（綜芸舎、一九七三年）を上梓している。
- (5) 和歌山県立博物館特別展「弘法大師と高野参詣」の事前調査。図版・解説は同編『空海と高野山』同名図録（和歌山県立博物館、二〇一五）に収載。
- (6) 本章内容は大河内智之「高野山麓（高野町細川地区）八坂神社の翁系四面」（『高野山時報』三六二、二〇二四年）を元とし、大幅に加筆した。
- (7) 調査は令和四年九月一五日、山中喜代美宮司、井手上治巳区長の立ち会いのもと、大河内、松原瑞枝（和歌山県教育委員会）、島田和（和歌山県立博物館）、飯野尚子（高野町教育委員会）、松本ら

（奈良大学大学院）、市田悠人（同）、嶋崎翔大（奈良大学学部生）により行った。

(8) 蛍光X線分析調査は二〇二四年四月八日に西山要一氏（奈良大学名誉教授）、清水梨代氏（和歌山市文化振興課）の協力を得て行った。調査機器はブルカーハンドヘルド社トレーサー、測定環境は四五kV・四〇mA・六〇秒。

(9) 天野文雄「翁猿楽の成立―常行堂修正会との関連―」（『文学』一九八三年七号、同『翁猿楽研究』所収、和泉書院、一九九五年）

(10) 和歌山県立博物館編『高野山麓 祈りのかたち』（和歌山県立博物館、二〇二二）、大河内智之「高野山麓の仮面―最新の研究成果から―」（『高野山時報』三五二八、二〇二二年）

(11) カルシウムは微量でケイ素が検出されており白土下地と想定され、薄赤はベンガラによる。調査は二〇二〇年一月二〇日、西山氏・清水氏の協力を得て行った。調査機器はブルカーハンドヘルド社トレーサー、測定環境は四五kV・四〇mA・二〇秒。

(12) 大河内智之「乾武俊氏の収集仮面について―中世在銘資料の紹介とともに―」（『和歌山県立博物館研究紀要』二〇、二〇一四年）

(13) 大河内智之「上花園神社仮面群と高野山周辺の仮面芸能」（赤松徹真編『日本仏教史における「仏」と「神」の間』（龍谷大学仏教文化研究叢書21）所収、龍谷大学仏教文化研究所、二〇〇八年）

(14) 大河内智之「高野山麓の仮面と芸能」（和歌山県教育委員会編集発行『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』二〇一五年）

(15) 調査は二〇二四年四月四日、大河内、阿久津武大（奈良大学博物館学芸員、奈良大学大学院）、小野寺大耀（同）、吉田堯永（奈良大学学部生）により行った。

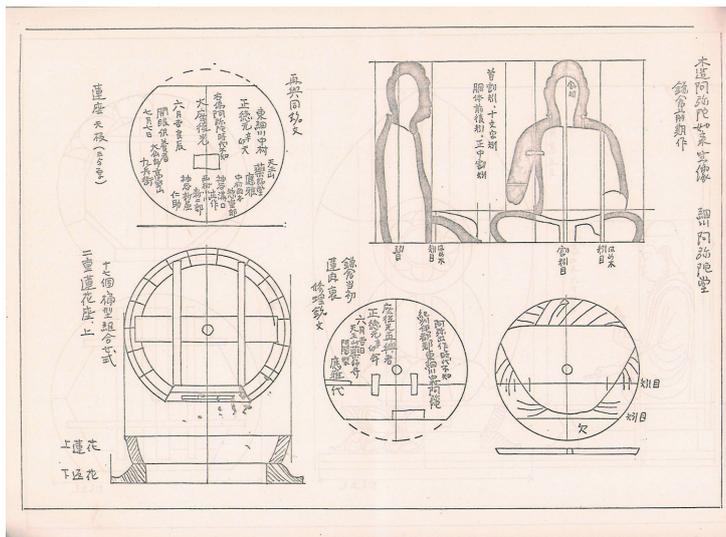
(16) こうした現状認識については、大河内智之「博物館機能を活用した仏像盗難被害防止対策について―展覧会開催と「お身代わり仏像」による地域文化の保全活動―」（『和歌山県立博物館研究紀要』二五、二〇一九年、同「盗まれる仏像―その背景と現状―」（学校法人奈良大学編『文化財学入門』、ナカニシヤ出版、二〇二三年）ほか参照。

(17) 大河内智之「博物館がつかない公共で支える地域資料―仏像盗難をめぐる問題を通じて―」（小川義和・五月女賢司編『発信する博物館―持続可能な社会に向けて―』ジヤイ社、二〇二二年）

（おおこうちともゆき／奈良大学准教授）

二章 太田古朴と  
高野山麓・細川地区の文化財

① 細川地区文化財の調査・修理 (26~31)



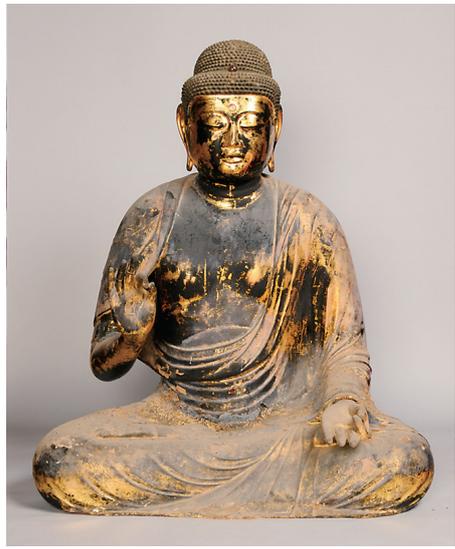
27 細川地区仏像修理報告書



26 太田古朴著『美伊参籠』

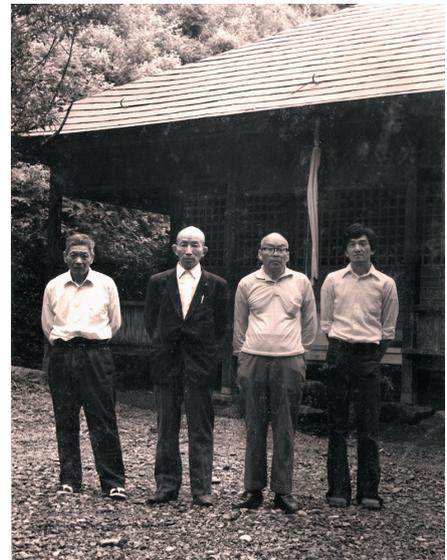


28-2 仏像修理報告アルバム (阿弥陀如来坐像)

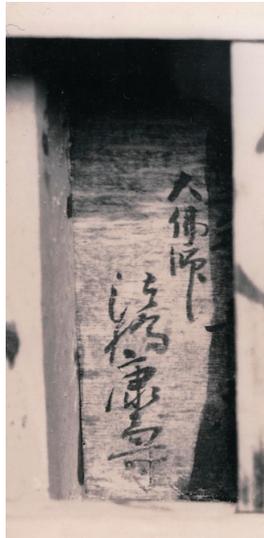


29 阿弥陀如来坐像

※左から下井関信市氏、新谷伝治細川区長、太田古朴。



28-1 仏像修理報告アルバム (集合写真)



28-4 仏像修理報告アルバム (千手観音立像)



31 千手観音立像



28-3 仏像修理報告アルバム (薬師如来坐像)



30 薬師如来坐像



② 細川八坂神社の仮面群 (32~41)



35 三番叟



34 翁



32 鬼面



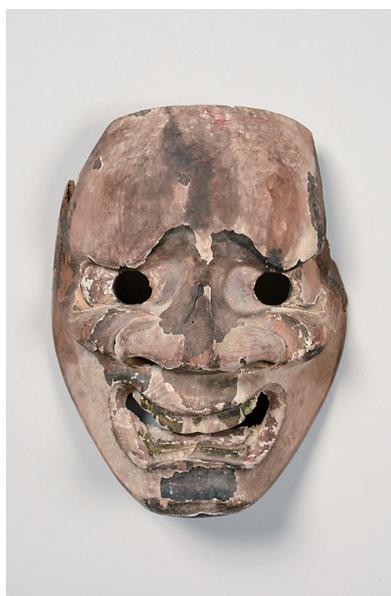
38 鬼神面



37 延命冠者



36 父尉



41 般若



40 癒見

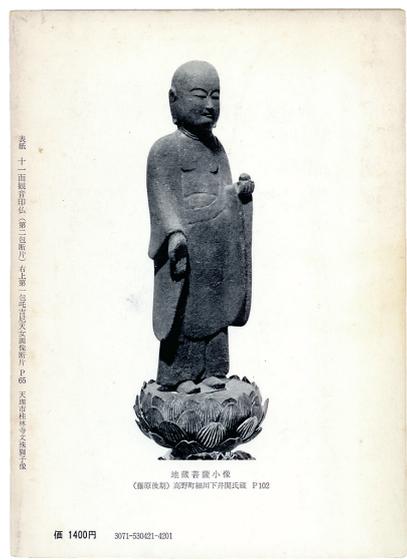


39 鬼神面

② 太田古朴が守った地藏菩薩立像(42)



42 地藏菩薩立像



参考2 『美仏参籠』裏表紙

※二章の各資料解説は本書大河内論文参照。

出陳資料一覧

一章 太田古朴の仏像修理とその成果

- ①太田古朴について
- 1 太田古朴写真 昭和時代 個人蔵
- 2 奈良新聞 昭和四年五月二日記事 個人蔵
- 3 奈良新聞 昭和五六年一月三日記事 個人蔵
- 4 太田古朴著書 昭和時代 個人蔵
- 5 奈良市表彰状 昭和五二年(一九七七) 個人蔵
- ②金峯山寺の聖徳太子及び二童子立像
- 6 聖徳太子立像納入品納置状況図 昭和時代 個人蔵
- 7 聖徳太子立像写真 昭和時代 個人蔵
- 8 聖徳太子及び二童子立像復元図 昭和時代 個人蔵
- 9 像内納入舍利塔図 昭和時代 個人蔵

- 10 『史迹と美術』二二五号 昭和二六年(一九四二) 個人蔵
- 11 『史跡と美術』一四五号 昭和二七年(一九四二) 個人蔵
- ③伝香寺の地藏菩薩立像
- 12 地藏菩薩立像納入品納置状況図 昭和時代 個人蔵
- 13 仏像調査ノート(その一) 昭和時代 個人蔵
- 14 仏像調査ノート(その二) 昭和時代 個人蔵
- 15 修理実績報告書 昭和五二年(一九五〇) 個人蔵
- 16 地藏菩薩立像納入品写真 昭和時代 個人蔵
- ④円成寺南無仏太子立像
- 17 南無仏太子像納入品納入状況図 昭和時代 個人蔵
- 18 南無仏太子像納入品図 昭和時代 個人蔵
- 19 南無仏太子像法量図 昭和時代 個人蔵
- 20 南無仏太子像写真 昭和時代 個人蔵
- ⑤東大寺中性院弥勒菩薩立像
- 21 弥勒菩薩立像図面 昭和時代 個人蔵
- 22 仏像調査ノート(その三) 昭和時代 個人蔵
- 23 弥勒菩薩立像写真 昭和時代 個人蔵
- ⑥興善寺阿弥陀如来立像
- 24 阿弥陀如来立像写真 昭和時代 個人蔵
- 25 阿弥陀如来立像納入品写真 昭和時代 個人蔵

二章 太田古朴と高野山麓・細川地区の文化財

- ①細川地区文化財の調査と修理
- 26 太田古朴著『美佛参籠』 昭和五三年(一九七八) 細川区蔵
- 27 細川地区仏像修理報告書 昭和五二年(一九七七) 細川区蔵
- 28 仏像修理報告アルバム 昭和五二年(一九七七) 細川区蔵
- 29 阿弥陀如来坐像(写真) 平安時代 細川区蔵
- 30 薬師如来坐像(写真) 寛文二年(一六七二) 細川区蔵
- 31 千手観音立像(写真) 正徳二年(一七二二) 細川区蔵
- ②細川八坂神社の仮面群
- 32 ○鬼面 南北朝～室町時代 細川区蔵
- 33 ○面箱 宝暦五年(一七五五) 細川区蔵
- 34 翁 室町時代 細川八坂神社蔵
- 35 三番叟 室町時代 細川八坂神社蔵
- 36 父尉 室町時代 細川八坂神社蔵
- 37 延命冠者 室町時代 細川八坂神社蔵
- 38 鬼神面 南北朝～室町時代 細川八坂神社蔵

- 39 鬼神面 室町～江戸時代 細川八坂神社蔵
  - 40 癒見 桃山～江戸時代 細川八坂神社蔵
  - 41 般若 慶安四年(一六五二) 細川八坂神社蔵
  - ③太田古朴が守った地藏菩薩立像
  - 42 地藏菩薩立像 室町時代～江戸時代 個人蔵
- ※名称に付した「○」は和歌山県指定有形民俗文化財を表す。



挿図2 勝利寺(慈尊院保管)と上花園神社の翁系四面



挿図1 細川八坂神社の翁系四面

# 太田古朴略年譜

- 大正三年（一九一四） 奈良県吉野郡吉野町で生まれる。父太田豊太郎、母リヨ（セイから改名）。本名亀一。
- 昭和六年（一九三一） 三月、奈良県立吉野工業学校木材工芸科卒業。四月、麒麟麦酒木工部に就職、すぐに退職し、八月奈良美術院奉職。
- 昭和十一年（一九三六） 明珍恒男（奈良美術院主事）のアトリエ勤務。
- 昭和十二年（一九三七） 奈良美術院退職。
- 昭和十五年（一九四〇） 戦時招集、奈良部隊入営（翌年二月解除）。
- 昭和十七年（一九四二） 金峯山寺聖徳太子立像調査（初回）。
- 昭和十八年（一九四三） 兵庫篠山部隊招集。金峯山寺聖徳太子立像調査、納入品確認。このころ萩原静と結婚し萩原姓。
- 昭和二十年（一九四五） 大阪部隊入営。八月解除。
- 昭和二十二年（一九四七） 妙法院内国宝修理所（後に財団法人美術院）奉職。
- 昭和二十三年（一九四八） 妙法院内国宝修理所退職。
- 昭和二十四年（一九四九） 八月、天理市福住別所建長五年銘地藏石窟石龕仏発見。
- 昭和二十四年（一九四九） 伝香寺地藏菩薩立像調査、修理。
- 昭和二十五年（一九五〇） 伝香寺地藏菩薩立像修理完了（二月）。
- 昭和二十六年（一九五一） 奈良仏像研究所創設。
- 昭和三十年（一九五五） 東大寺中性院弥勒菩薩立像調査、修理。納入経巻に年紀確認。
- 昭和三十一年（一九五六） 円成寺南無仏太子立像調査、納入品確認。
- 昭和三十五年（一九六〇） 『造像法』（綜芸舎）出版。
- 昭和三十六年（一九六一） 『木割法』（綜芸舎）出版。
- 昭和三十七年（一九六二） 興善寺阿弥陀如来立像調査、修理。法然直筆の消息（断片）を紙背とした結縁交名帳発見。
- 昭和三十八年（一九六三） 『寄木法』（綜芸舎）出版。
- 昭和四〇年（一九六五） 『仏像研究三十年』（綜芸舎）出版。
- 昭和五〇年（一九七五） 高野町細川地区依頼による仏像調査・修理開始。
- 昭和五十一年（一九七六） 『仏彫 太田古朴作彫目録』（綜芸舎）出版。四月、子息萩原正美（日本画）と個展開催（於奈良県文化会館特別展示室）。
- 昭和五十二年（一九七七） 奈良市表彰。高野町細川地区に報告書提出。
- 昭和五十三年（一九七八） 『美佛参籠』（綜芸舎）出版。
- 平成十二年（二〇〇〇） 逝去。享年八六歳。
- ※修理実績や著作は便宜上本展に関わる主なもののみを示した。業績詳細は太田古朴『仏像研究三十年』、同『仏彫 太田古朴作彫目録』、同『美佛参籠』を参照のこと。

奈良大学博物館企画展

## 太田古朴が見た山里の文化財

— 高野山麓・細川八坂神社の仮面群 —

発行日…令和六年（二〇二四）五月二七日

編集…大河内智之（奈良大学文学部准教授）

発行…奈良大学博物館（奈良市山陵町一五〇〇）

印刷…共同精版印刷株式会社





翁 (左上)・三番叟 (右上)・父尉 (左下)・延命冠者 (右下) 細川八坂神社蔵